

私が初めて洗礼を授けさせて頂いた方は、新潟の方でしたが、初めその方はある宗教団体に入っておられました。それはエホバの証人・ものみの塔という団体でした。そのものみの塔の方は、お宅を訪ねてこられた時には、親切で、笑顔で、ちょうど子育て中であったその方は、いろいろとお世話をしてもらい、たいへんな時期であったのでとても助かったのだそうです。そして、そのうちにもものみの塔の集会所である王国会館に行かれるようになり、正式な会員となられたそうです。しかし、まもなく今度は自分も戸別訪問をしなければならなくなって来て、なかなかそこまではできないでいましたら、いかないと神様から裁かれるとまで言われるようになり、どんどん辛くなって来て、家族のことも顧みられなくなり、家庭崩壊寸前のところまで行ってしまわれたのでした。精神的にも追い詰められ、そして、これじゃいけないと思われて、私たちの教会の門をたたいて下さったのでした。そうしてお話をお聞きするうちに、礼拝に出て下さるようになり、そして「ああ、神様は愛の方なのですね、私たちを裁かれる方ではないのですネ、良かった」と気がつかれて、礼拝でも安心して集えるようになられて、洗礼をお受けになられ、クリスチャンになられたのでした。実は、今日の聖書の箇所を読むたびに、私が初めて洗礼を授けさせて頂いたその方のことを思い出します。

もう一度マタイによる福音書7章15節以下の箇所を見て下さい。(読む)

なぜ、ここで急にイエス様は偽預言者のことについて教え始められたのでしょうか？

それは、この前の箇所との関連があるからです。7章の13節には「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い」とありました。滅びに通じる広い門や道に入っていく者が多いことをおっしゃっておられました、それは同時に、そのような広い門や道に導こうとする指導者も実はいるということではないのでしょうか？間違った道を正しい道だと誘いこもうとする導き手もいるからと注意しなさいよという教えではないのでしょうか？

いいのでしょうか？ここでイエス様は偽預言者を警戒しなさいと言われていることは、偽預言者という存在がいることは前提になっているのです。間違っている預言者、偽物の預言者が存在するかしないかが問題になっているのではないのです。そうではなくて、もう現実に存在しているから、彼らに惑わされてはいけないと言われているのです。どうでしょう。

この偽預言者を警戒しなさいというイエス様の警告を聞いて、ああ、もっともだなあ一世の中にはおそろしい、とんでもない宗教や宗教家っているよね、人を脅して恐怖をあおって人々を駆り立てるような、自称宗教家っているよねと。でも、自分達はもう大丈夫。だってもう真の救い主、イエス様を知ったから、自分達はもういいよねと思われるかもしれない。自分たちは、さきほど申しましたエホバの証人や変な宗教に引っ掛からなくて本当によかったと。しかし、そうじゃないのです。その偽預言者は15節で「彼らは羊の皮を身にまとってあなたがたのところへ来る」とあるからです。つまりここで読み飛ばしてはいけないことは、その偽預言者たちが「あなたがたのところへ来る」ということなのです。この山上の説教は何より信仰者たち、教会のことを頭に於いてイエス様は語っておられます。特にこういう警戒や警告の言葉は、教会の信者たちに向かって語っておられる意味が強いのです。従って、この「あなたがたのところに」ということは教会の中までも入り込んでくるということです。

そう読むと、この「羊の皮を身にまとって」ということは実はもっと切実な意味を持って来るのです。つまり、普通は、この「羊の皮を身にまとう」という言葉の意味は、鋭い爪とか牙とかを持たない姿で近づいてくるとか、あえてやさしげな、まったく攻撃しようなんて思わせないような形を装って来ると読まれるのですが、あえてここでイエス様が「羊の姿で」とおっしゃったということは、羊イーコール我々クリスチャンということをおっしゃられるとも読めるのです。ヨハネによる福音書10章で「わたしは良い羊飼い。わたしが来たのは、羊が命をうけるため」と語られていますように、私たちは主の羊なのですね。で、その羊と同じ姿で入ってくるよと言われておられるのですから、表面的には、あたかも私たちと同じクリスチャンの姿を装って入

ってくるということだとも考えられるのです。信仰深い風を装い、信者であるという仮面をかぶって、偽預言者は入り込んでくるのだと。だから気をつけないといけないのだよと、だから警戒しなければいけないとイエス様はおっしゃっておられるのです。

どうでしょうか？なるほどなあとは思います。私たちは人の表面的な姿、形で簡単にその人を判断してしまふところがあります。そのたずまいとか雰囲気とかで人を判断し、実はぜんぜん中身は違っていたということを後で知ったり、あるいは、その物腰の柔らかさややさしさに信用してしまった結果、ころっとだまされてしまったというような経験をなされたことがおありではないでしょうか？そしてその度に、ああ、今度はもうだまされないぞ、もっと慎重に人をよく見て判断しなきゃと思うのです。

しかし、その偽預言者は、外側は羊の皮を身にまとっているのですが、「内側は貪欲な狼である」とあります。羊をたべちゃうということですね。羊を食食物にする、羊の命を奪うこと、それが目的、それが本心だということです。ここでも、なるほどと教えられるのは、旧約聖書では、預言者は本来、人を導く立場、あるいは人に良き道、悪しき道を示す立場にある人のことを言います。ところがこの偽預言者は、最初は羊の格好、つまり信者の姿で自分は指導者ではない、人を導くものではないと、むしろ自分も求める者、従う者、一介の信者に過ぎませんと腰を低く、高ぶったところがない姿勢で入ってくるということなのです。指導者の顔はぜったいしないということです。ところが、そうしておいて、いざ本性を現すと、狼になる、羊を食食物とする、つまり、自分が指導者になろうとし、わが元へと他の羊たちを引き寄せるといったことなのです。しかも、この狼は「貪欲な」狼であると。つまり、いっぱい羊をたべるといふこと、羊を奪っていくのです。そして、これは、結局、自分の腹と申しますか、自分の欲望を満たすことが目的だということです。

考えてみれば、イエス様がヨハネによる福音書10章で、私は良い羊飼いでであるとおっしゃった時に、なぜ良い羊飼いと云えるかと言うと、私は羊のために命を捨てるからだとおっしゃいました。そして、そのまことの羊飼いがご自身の羊たちの命を守るために、十字架につけられ命を捨てられたのでした。それに比べて、今日の箇所はまさに正反対、偽の預言者は自分の強欲、自分の腹を満たすために羊の命を奪うといわれているのです。本当の預言者、まことの預言者は、羊のために命を捨てる存在だと、そこが全く違うということです。

じゃあ、偽預言者かどうか、どこで見分ければいいのか？「警戒しなさい」と言われていますが、どこをどう警戒すればいいのか、その見分け方はあるのでしょうか？

実は、それがこの後の16節以下の言葉です。「あなたがたはその実で彼らを見分ける。すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。良い木が悪い実を結ぶことはなく、また、悪い木が良い実を結ぶこともできない。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。このように、あなたがたはその実で彼らを見分ける。」とあります。この言葉はもう一度、このマタイによる福音書の12章の途中でこの同じ言葉を違った角度からイエス様は語られる時が来るのですが、今日のここは、やはり偽預言者との関わりで語っておられる言葉として読むべきでしょう。つまり、その生らしている実で偽預言者かどうかを見分けなさいと言われておられるのです。しかし、そう言われる場合のその「実」とはいったい何なのでしょう？

ここで「実」という言葉で表わされているものは大きく分けて3つあるのではないかとされています。

一つ目は、成果とか実行という言葉がありますように、私たちも、「実」と聞くとそれは「行い」であろうと考えますね。木がならず実とは、その人の成果、業績であると。これが一つの読み方です。

つまり、その人が表向きどんな姿をしていようが、どんな外観を装って入りこもうとしている人物であろうが、その人物のその結果として表れてくるものが大事だと、そこで見分けろということですね。もし、良い実を生らす、良い結果や業績を挙げているならば、それは良い木ではないかということです。

このことについて、聖書解説者の中に、シュラッターという人がおられて、その方はこう述べています。「偽預言者であるかどうかは、彼らが信仰を働かせているのか、傲慢にすぎないのか、また、平和を造り出すのか、争いを巻き起こすのか、また悪を克服するのか、強めるのか、それとも人を清めるのか、汚すのか、彼らも

たらずものを見ることができる」とそう書いています。なるほどと思いました。先ほど申しました、表向きは羊、即ち信者の皮をかぶっておいて、後から狼、即ち指導者になるということ、つまり指導者になりたがるということから言えば、途中でどんなにりっぱなことを言っていようが、どんなに良い信仰深い態度を示していようが、最終的に「イエス様に従え」と言うのではなかったら、それは偽預言者だということではないでしょうか？そして、自らもイエス様に従うはずではないか、そうであるならば、平和を作り出すこと、悪を克服すること、人を清め、癒すことを求めるはずではないか、それがその行動によって偽預言者かどうかで見分けるということではないでしょうか？結局は、自分に従わせようとしているのであれば、あるいは、自分たちの思想や考え方、自分たちが作った団体へ従わせようとしているならば、それは偽預言者であると。私たちの周りでイエス様を信じる信仰を大事にしないで、自分たちの言い分が通るかどうかが、意見が実現されるかどうかばかりを追い求めることがあるならば、それは偽預言者です。そのような人たちが、途中でどんなに人間的に見えても、やさしさを売り物にしても、結局は争いを巻き起こし、他を排除し、人をないがしろにすることになってしまいます。そのことをちゃんと見分けなさいと言われていたのです。

もう一つ、この「実」ということで、この場合に、その実をならず「木」を人間のことが言われていると考えますと、その実はその人の言葉であるという理解もあります。つまり、良き人からは良き言葉が、悪しき人からは悪しき言葉がおのずと出てくるという理解です。

イエス様もルカによる福音書の6章で「善人は良いものを入れた心の倉から良いものを出し、悪い人は悪いものを入れたか倉から悪いものを出す。人の口は心からあふれ出ることを語るのである」とも語っておられます。つまりその人の語っている言葉から見分けることができるということです。先ほどの羊から狼ということ言えば、最初はなだらかな言葉や人に取り入るような滑らかな羊のような言葉を使っているとしても、どうしても、その人の心の中にあるもの、狼の心は言葉として出てきてしまうから、そこで見分けなさいということです。舌先三寸で渡りぬけると思っている者もしかしどこかでその本音は表れているものだ。これは、私たち自身も考えなければならないことではないかと思います。心からの回心がやはり大事なのだと思います。そうではないでしょうか？

最後に、3番目のこの「実」ということに対する理解として、その木そのものを指導者と考えますと、その木から出てくる実とは、信者たち、その木である指導者たちに従う者たちと読む理解がもう一つあります。

そうすると、良き指導者からは、良き信者が生まれ出る、けれども、悪しき指導者のもとにはどうしたって悪しき信者しか生まれえないということになります。私は、ここであのヨハネによる福音書15章でイエス様が語られた有名な言葉を思い出します。「私はまことのぶどうの木。私につながっており、私もその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」です。良い木につながっている時に、私たちも良い実となることができるのです。だから、大事なのは良い木につながっていることがだいじなのだということに尽きるのではないのでしょうか。主イエスにつながっていることがやはり最も大事だということになるのです。偽預言者は、途中から自分が指導者になりたがるということですから、イエス様につながって、イエス様の羊として生きる生き方からおのれが指導者に、あるいは自分が自分の主人になろうとする時、偽預言者に成り下がってしまうのです。つまり、イエス様から離れてしまうということなのです。

その意味で言うならば、今までこの偽預言者に関して、外から教会の中に入ってくる存在としてもっばら考えておりましたが、もともと羊であったものが途中から狼になるということもまたあるかもしれないと思うのです。それは、私たちでも起こりうるということなのです。つまり、イエス様という良い木につながれたもの、繋いで頂いた存在なのに、そのすばらしさ、その恵みを忘れて、その木から離れて他の木につながろうとしたり、あるいは自らが指導者と、羊を自分に従わせる者となろうとしてしまう、変わってしまう、そのようなこともあり得るということなのです。このような危うさ、これもまた私たちの中にある人間の罪として認めるべきことではないでしょうか？それは、私たちの中にもある、この教会の中にも起こり得るということなのです。人に対して、教会に対して、偽預言者になってしまう危険があるのだと、だから注意しなさいとイエ

ス様はあえて厳しく警告しておられるのではないのでしょうか。

私はどうしてもここでイスカリオテのユダのことを思います。彼はイエス様の羊でした。でも、そのイエス様を裏切っていきます。そこには色々な理由がもちろん考えられますが、そのひとつに、今日の箇所から考えるならば、羊から狼へ、つまり自分が指導者になろうとした、自分がイニシアティブを持ちたかった、自分の思いでイエス様を動かせると思い、動かそうとしたのではないかと思うのです。それは何もユダだけの罪ではない、私たちにもそういうことがあります。私だってそういう誘惑があることを思います。自分の意見が通らないと承知できない、自分の存在自体が否定されたと感じるのです。従わせたい誘惑です。でも、そうじゃないはずで、そこで通るべきものは主のみ旨です。成るべき実は、主の救いの業です。そうじゃなきゃ教会ではない、偽りだということなのだと思うのです。

今日はもう一か所、旧約聖書のエレミヤ章8章も読んで頂きました。ここにも偽預言者が出てきています。「預言者から祭司に至るまで皆、欺く。彼らは、おとめなるわが民の破滅を手軽に治療して平和がないのに『平和、平和』と言う。彼らは忌むべきことをして恥をさらした。しかも、恥ずかしいことは思わず、嘲られていることに気づかない。それゆえ、人々が倒れるとき、彼らも倒れ、彼らが罰せられるとき、彼らはつまずくと主は言われる。」です。いつの時代にも人の関心を引こうとして気休めや人気取りをして、自分の方に人々を引き付けたいと考える人間はいるということが分かります。

最後に、19節と20節で「良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。このように、あなたがたはその実で彼らを見分ける。」とイエス様はおっしゃいます。これは最後の審判のことが言われています。即ち、最後にちゃんと神様が事の良し悪しを裁いて下さるということです。それは逆に言えば、究極的に偽預言者へのその裁きは神様に最後はお任せするということです。偽預言者の裁きは神様にお任せして、私たちはひたすら偽預言者に警戒していくこと、そして自ら偽預言者を見分ける目をもっていくこと、そして自分の中にもある、そのような罪に注意深くあろうということ、それに尽きるということです。裁くことが目的ではありません。私どもが裁くとなると、それこそ裁き主という指導者になってしまうということです。それは危ういのです。

今日のイエス様の言葉の木になる実が、私たち信仰者だということならば、逆にいえば、この私たちという実を通して、イエス様という木を見られる、判断されるということがあり得ることではないのでしょうか？それは、私たちが何か人目を引く良き人間になることとかではなくて、むしろキリストにつながることの素晴らしさを示していくこと、本当にキリストにつながるということがどう生きることなのかを、その平安を慰めを表現していくことではないのでしょうか。イエス様こそ真の救い主、まことの羊飼いであられることを言い表していく、そのために礼拝の中で「使徒信条」を告白し、聖餐式をなしているのではないのでしょうか。少なくとも、この礼拝こそキリストにつながることの素晴らしさを讃美する時ではないのでしょうか。